



都市景観・まちづくり シンポジウム

21世紀における都市景観とまちづくり



平成13年11月14日(水) 13:30~16:30
金沢市民芸術村 (PIT2: ドラマ工房)



左から、川上氏、森氏、荒井氏、山岸氏、鶴賀氏

- コーディネーター
金沢大学工学部教授……………川上光彦氏
- パネリスト
金沢工業大学教授・建築家……………森 俊偉氏
金沢美術工芸大学教授……………荒井利春氏
堅町商店街振興組合マムの会長……………山岸淑子氏
金沢経済同友会常任理事……………鶴賀裕行氏

都市景観とまちづくりについて考えるシンポジウムが、市民約80名の参加を得て開催され、「21世紀における都市景観とまちづくり」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。歴史的なまちのみを残す金沢市は、これまで「まちのみ保存や斜面緑地保全などの独自条例を制定し、幅広い取り組みを行ってきました。21世紀に向けて、どのような展開が考えられるのか、参加者とともに議論が交わされました。

これまでの都市景観の取り組みについて

教習「一人がまちをつくる。そしてまちが人を育て」とよく言われています。元気のあるまちでは、創造の場がたくさんつくられ、人と人、人と環境の立場から考えるまちづくりがされています。金沢では、古いものの保全は進んでいますが、創造の場を作っていくことも重要だと思えます。

山岸●かつて、金沢は戦災を受けなかったことから、日本を代表するような景観が保たれていました。パブル経済で全国の土地の値段が高騰した時、金沢は地方都市としては異常なほど土地の値段が高くなりませんでした。そのため土地は小さく分割され、中心部における住宅地、商業地は虫食い状態となり、空洞化が起る十年間で驚くほど進みました。このようなことをしっかりと反省し、21世紀に向けて条例がよい形で機能していくことを期待しています。

荒井●子供から老人までが暮らしやすい生活環境をつくることは、そこに暮らす人々が自分たちのまちをどうつくっていくかを考えています。まちを豊かにしていくには、そこに暮らす人々が自分たちのまちを豊かに、感じて、イメージすることが重要だと思えます。専門家と肩を並べる住民ワークショップ型のまちづくりによって、領域を超えた方法論が生まれてくると思います。これまでの受け身の方法論から、計画段階で住民が主体となって考えていけるような21世紀型の方法論をつくる必要があります。

森●これまで市が行ってきたまちづくりは、金沢の特徴がとてま大切にされています。それは、一つは45万人、美しいまちづくりを目指していきたくてです。

都市には自然を多く活かしていること、二つ目には伝統や歴史の要素を踏まえて景観を考えていること、三つ目に都市性、現代性を積極的に組み込んでいくこと。懸念していることは、道路の拡幅、用水につけられた安易な手摺り、演出過多とも感じられる歴史的建造物の再建などです。

【参加者からの意見】
「暮らしやすい生活環境をつくるには、一人一人が豊かでないといけないのは、金沢の中心部では観光客のための駐車場が少なく、駐車できない車によって混雑している。古い家を手放す人が多く、空洞化が進んでいる。電線類を地中化した白菊町、増泉では、かえって看板広告が目立ってきているという問題が生じている。屋外広告の規制により都市全体の景観が保たれることから、行政はこれ以上規制してほしい。」

「暮らしやすい生活環境をつくるには、一人一人が豊かでないといけないのは、金沢の中心部では観光客のための駐車場が少なく、駐車できない車によって混雑している。古い家を手放す人が多く、空洞化が進んでいる。電線類を地中化した白菊町、増泉では、かえって看板広告が目立ってきているという問題が生じている。屋外広告の規制により都市全体の景観が保たれることから、行政はこれ以上規制してほしい。」

屋外広告の規制をどうするか

教習●ヨーロッパでは、ハンバーガーやコーラの店舗があっても、大きくて派手な広告は厳しく規制されています。情報社会の今、企業側にとっても街頭の広告はそれほど効果がなくなっています。広告に対して、厳しい規制をつくるべきです。

金沢市でも、各地区ごとに住民主体で条例をつくり、美しいまちづくりを目指していきたくてです。

川上●ヨーロッパでは市民の支持のもと、きめ細かい厳しい規制が行われています。金沢市でも、駅西や若松、錦見地区などは屋外広告の少ない郊外住宅地をつくっています。

森●私はかつて東京都新宿区の景観アドバイザーをしていました。新宿はサイン看板であふれている印象がありますが、エリアによって非常に厳しい規制がされています。金沢市の看板規制は大変厳しいと思います。

市民参加型のまちづくり

荒井●市民参加型のまちづくりには個人個人が豊かなくては、といった一面はあるかもしれませんが、そこに暮らす人がどのようにまちに関わっていくかは、経済的な豊かさというより、心や関係性の豊かさであると思います。今回のような場で、それぞれの立場から見えることを話し合うというところでワークショップで、こういった場を重ねていくことで、豊かさがつくられてくるのではないのでしょうか。

川上●金沢市でも、ワークショップ的な様々な試みがされています。一例としては、近隣の住民参加による公園づくりがそうで、設計段階から話し合われて進められています。

山岸●堅町商店街では、環境保全と近代的都市空間



熱心にメモをとる姿も見られた



大勢の人が興味を持って参加した



様々な立場から、多くの意見が出された

の創造を住民参加型で行っていましたが、車の排除や回遊性がテーマとなったとき、エリアだけのまちづくり協定がいかに非力かを知りました。近隣を含めたまちづくり協定を共有できるシステムがあれば、一歩進んだまちづくりができるのではないかと思います。

自然環境や斜面緑地について

森●金沢は市全域では緑の割合が多いが、中心街については緑の量が極端に少ないように思います。大都会に比べて、緑に対する危機感が生まれにくかったことが原因とされています。

川上●これまで景観というところでテーマとされてきたのは、物的な環境が中心でした。ヒートアイランド現象が問題となる21世紀の都市づくりでは、環境的な問題が重要なテーマになってきます。

公園や街路樹をつくる歴史が浅いため、適した樹種の選び方、剪定、利用の仕方が根付いていないわけですから、もともと工夫していく必要があります。

また、金沢では海と山をつなぐ河川や斜面緑地が空気の流れる道となり、鳥や動物が行き来するルートにもなっています。そんな視点も大切だと感じます。



それぞれの持ち場が自然と決まる

落ち葉清掃

西インター大通り

平成13年12月1日(土)、西インター大通り(野町~松島)で落ち葉清掃が実施されました。西インター大通り景観形成協議会が主体となって平成7年から、毎年この時期に行われています。今年も周辺の町会や銀行、商店を中心に、市民約400人が清掃に参加しました。明け方にみぞれが降るといった寒さの中でしたが、約1時間、参加者はゴミ袋やほうきを手に清掃に励みました。



協力し合い、効率よく進められた

卯辰山山麓 巡る寺院群を



親子で参加

平成13年10月13日(土)、5回目となる「まちなみ体験ワークショップ」を開催しました。今回は、この界隈の寺院群を歩き、お寺の由来や歴史を紐とぎながらの散策となりました。

加賀藩3代藩主によって築かれた卯辰山麓寺院群は、その数が40以上もあり、それぞれに興味深い由緒由来が残されています。「まちなみ体験ワークショップ」では、これらの歴史をイズで解きながらウォークラリー式に16カ所を巡りました。

午前9時に心連社に集まって、住職さんのお話を伺った後、遠州流の書院庭園を見学しウォークラリーがスタート。西養寺では、釈迦出土図をはじめ多くの神仏像を見学しました。時間が限られていたため、ゆつくりとみることはできませんでしたが、住職さんの丁寧な説明があり、また改めて訪れたいという参加者の声が多く聞かれました。四国88カ所霊場すべての本尊をかたどった石仏がある宝泉寺では、エッセイスト国本昭二さんに石仏の説明や宝泉寺から眺めた金沢のまちなみのすばらしさを語っていただきました。



心連社にある遠州流の書院庭園



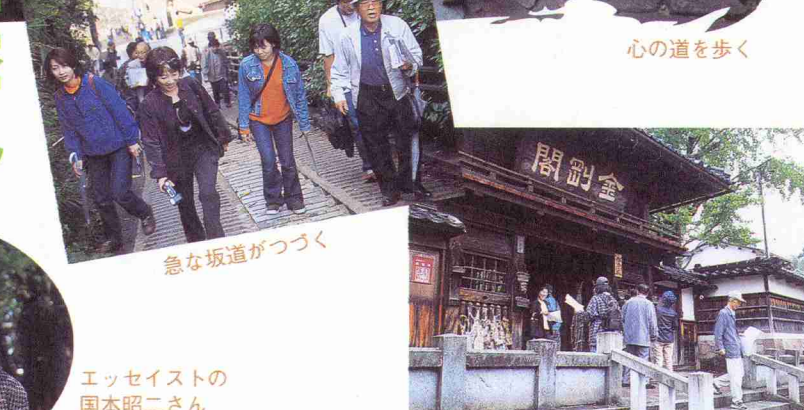
西養寺で釈迦出土図をみる



エッセイストの国本昭二さん



心の道を歩く



急な坂道がつづく

寺院に隠された答えを探した



参加者と講演者が間近で話し合いました

「茶席で語る金沢の彩り」と題した色彩フォーラムが、平成13年11月2日(金)、高岡町のお茶室「松茸庵」で開催されました。お茶のてなしの心や相手を感じ、いやる心、さらにお茶席の落ち着いた雰囲気、金沢の街の色彩に深く関わっているのではないかと、この思いからお茶室での開催となりました。

講師として、公共の色彩を考える森の村山友宏副委員長、大橋啓太さん、中野和代さんの3名の方をお迎えし、お茶のてなしの心や相手を感じ、いやる心、さらにお茶席の落ち着いた雰囲気、金沢の街の色彩に深く関わっているのではないかと、この思いからお茶室での開催となりました。

「全国的な駅周辺では、雑居ビルが広告によつて景観が損なわれているが、金沢駅周辺については雑居ビルが少なく、すっきりとした景観を保っている。」
「黒、赤、青という色は、万葉時代から日本の基本的色彩である。それが、金沢の街並みの中に、文化的な濃度の濃さが金沢にあるのではないか。」
金沢が他の都市と違い、重みが、あり、色に対する愛情があること、意見が多く出され、金沢の街の色彩にお茶の心が深く関わっていることを再認識いたしました。



参加者からも多くの意見が出される

景観の例を挙げながらの説明

本願寺金沢別院 (西別院)

本堂・経蔵・鐘楼・山門

金沢市指定保存建造物に指定されました

金沢市指定保存建造物		
名称	本願寺金沢別院 本堂・経蔵・鐘楼・山門	
所在地	金沢市笠市町2番47号	
種別	寺社建築	
●建築年次・構造・面積		
本堂	嘉永2年(1849)	木造・本瓦葺 947.99㎡
経蔵	慶応2年(1866)	土蔵造・棧瓦葺 1F 27.57㎡ 2F 27.57㎡
鐘楼	安政3年(1856)	木造・棧瓦葺 14.58㎡
山門	明治26年(1893)	木造・本瓦葺
●所有者 (宗)本願寺金沢別院		

境内には本堂をはじめ数棟が建ち並んでおり、その大伽藍は、幕末から明治期に建立された建物を包含する例で県下の総持寺と共によく残している。



沿革●創立は「金沢別院沿革史」によれば、延元4年(1339)、本願寺第3代覚如上人が各地を巡行して教導された際、もと金沢城の本丸の位置に草庵を建立し、その名を「本願寺」と名づけ、第2代如信上人の13回忌をつとめたことに始まるとされる。本願寺は加賀、能登、越中三州の一向宗の根本道場として、別名「御山」と尊称され、後に本願寺の別坊(御山御坊)となり、一向宗の拠点であった。

その後、天正8年(1580)に佐久間盛政に攻め滅ぼされたが、前田利家の金沢入城後の天正11年(1583)、寺地を袋町(現在の尾張町2丁目、安江町)に賜り再建した。慶長16年(1611)第3代藩主利常から現在の地

現在、「宗教は必要ない」という人が増えているというが、交通安全、家内安全、病氣平癒、受験合格、商売繁盛など、およそ80パーセントの人が神仏にお願いするそうです。それどころか、非戦平和を旗印とする宗教において、戦争が今なお続けられている。なんと愚かしいことか。

自己の真の姿を自覚し、歩んでゆく道を開いていくところに宗教の役割がある。別院存在意義と宗教の役割を確認しつつ、地域の方々の「心のオアシス」として、新たな歩み。